

# 間宮海峡発見以前の

## 樺太が表現された海外作成の地図

木村 東一 郎

### 一 はじめに

日本の北海に位置し、江戸時代には蝦夷地方と呼称されたそのなかの北海道を除く諸島は、江戸時代より明治時代に至るまで、日本とロシアの両国間で領有権の主張をめぐる紛争が繰り返されてきた。その後、日露戦争の終結が機会となり両国における条約によって、両国相互の領有権が確立した。しかし、太平洋戦争の終結後、また日・ソ間の北方領土権問題は形を変えて再燃し、今もって解決されない実情にある。

従来、かかる地方はロシアのみならず、世界の国々が地理上の発見時代つまり、十五世紀後半以後、注目し探検の対象としてきたところである。日本の北辺事情は、幕末に至りその守りを急務とし、そのため幕命による数度の蝦夷地の探検が試みられ、その結果は、間宮海峡の発見により、ひとまず段落のかたちとなるが、この発見があまりに高く評価されたがためか、これ以前の北辺の探検や地図作成の事情がその蔭にかくれてしまった観がある。

そこで、蝦夷地方のなかでも特に大島であり、日露間の問題の島であった

樺太をとりあげ、この島が地図上にどのように位置づけられ展開したか、また、日本で作成した樺太地図がそれといかに関係するのか、などの問題について考究することを目的するが、本稿は、まず試論として海外作成の地図三三図を中心に検討した結果の概要を述べることにする。なお、本稿は昭和四四年度、日本地理教育学会の学術大会に発表した要旨に加筆したものである。

### 二 地図上に見える日本北洋の小島群

一四九二年(明応元)、アメリカは周知のごとくコロンブスによって発見された。その当時の概念は、まだアメリカはアジア大陸の一部か、あるいは、アジア大陸に属する大きい島であろうというものであった。そしてこれが、極北の近辺で区切られた独立した一大陸であると認識されるに至るのは、一六世紀も中半になってのことである。<sup>(1)</sup>このことから考えてみると日本の北海に存在する島々のうち樺太などが、世界の人々に認識され、理解されるのはそれからずっと以後のことになる。いずれにしても、樺太

の発見の歴史を究明することはきわめて至難である。そこで、現存する地図によって北海にうかぶ樺太らしき島、あるいは樺太が樺太として地図上に出現する過程を探究してみることにする。

ここに取り上げる地図は当然のことながら、海外で作成された世界図、ないしはアジア図が対象となる。かかる地図のなかで、日本の本土が位置づけられ、その北海に島の形跡が表現された初期のものとしては、一四七四年（文明六）トスカネリ（Paolo Pozzo Toscanelli）が作成し、これをコロンブスに贈ったと伝える世界図が上げられる。本図は原本を失い書翰を資料として復原した地図といわれているが、本図には長方形の単調な姿ではあるが、日本が表現されている。その位置は北五度～三〇度（北緯の意味・以下数字のみ示す）のなかに描写され「CIPANGU」の表示がある。そして、この北方の三〇度～六〇度の附近に一五を数える小島が点在し、なかでも最大の島の中央部を五〇度線が通過しているのが注目される。もちろん、この島が樺太であるかどうかはまったく不明である。ともあれ、日本が位置づけられ、その北方に小群島を表現した地図を作成したからには、当時すでに、ともかく島の存在する事実を意識した人々のいたことが推測される。しかし、本図は前述したように復原図であるため多少の問題を残すことになるが、それからやや下って一四九二年（明応元年）ベホイム（Martin Behaim）の作った地球儀には三〇度～三五度の位置に「Zipangu」があり、その北方に小島が点在し、島の南端部を五〇度線が通過しているのがトスカネリ図と相違する。また、一五〇七年（永正四年）ワルドゼーミューラー（Martin Waldseemüller）の世界図には「Zipangri」の北方三〇度～六〇度のなかに二六を数える島が見えるが、上記の五〇度線と変り六〇度線の通過となっている。

いずれにしても、まだ経度や緯度の基準も不十分な時代であり、また、とくに経度についてはその基点が三図ともまちまちである概念であるからして、かかる地図に表現された島々をもって樺太ないしは北海道および千島列島ではなからうかと考えることには無理がある。しかし、当時の世界図に日本島が意識されていたことは当然のことながら、その北方に島の存在が意識されていたということは、この以後の時代に重要な課題を継承させることになる。ところが一五世紀において、日本島以北にかかる島々の存在を認め、これを世界図上に折角登上させておいたにも拘わらず、次の時代にはこれらの島々は地図上から消滅する過程がある。

すなわち、一五一一年（永正八年）ストブニッツァ（Johannes Stobnicza）の世界図がそれである。この図には五度～三〇度内に「Zipangri」は表現されているが、その北方には一つの島さえ見当らない。また、一五三五年（天文四年）の項と推定のジツルフォ（Francesco Giolito）作成の世界図には二〇度～三〇度に「Cipangus」があり、一五三八年（天文七年）メルカトル（Gerhard Mercator）の世界図には「Sipango」の南端を五〇度線が通過している。そして、一五四五年（天文一四年）ミュンスタ（Sebastian Munster）の世界図には約一五度～三〇度の位置に「Zipangri」が見えるが、しかし、以上三図のいずれにしても、ストブニッツァ図と同様に日本の北方海域には極小の島さえも認めることができなくなる。もちろん、前時代に地図上に現れた島々が、この時代に地球上から一時影をひそめたわけのものではなく、一六世紀の前半においてはかかる島々に対する関心が低下したのではなからうか。しかし、また北洋のこの小島群はこんどは形を変えて、次の時代の世界図に出現することになる。

### 三 日本の北海に一島の出現

一六世紀も後半にはいると、一五六二年（永祿五年）ヴェリユ（Bartolomeu Velho）の世界図<sup>(9)</sup>が出る。従来の地図上には日本を *Cipangu* または *Zipangri* あるいは *Sipango* などの文字をもって表現したものが多かったが、しかし、本図には日本を *LAPAM* と表現している。そして、この以後の地図には *LAPAM* ならぬ *IAPONIA* の文字に変わり、日本名の綴りにも変化が見える。これは、もちろん作図者の用語上の問題であることはいうまでもない。

さて、本図には日本が三一度〜四九度のなかに描写され、従来の図に比較するとだいぶ北寄りになる。しかも、そのすぐ北方五〇度〜五八度のなかに菱形の大きな一島が出現する。そして、この形が北海道の形に類似しているのが注意される。日本島も九州・四国などが本州から分離し、従来の日本表現の概念からするとかなりの進歩のあとがみとめられる。北海道に似た北方の一島は形が似ているばかりではなく、その島の位置もかなり正しく確認され、認識して図上に表現したかのように感じとれるほどである。

当時、ヨーロッパ人が北方海域のなかで、とくに最初に注意したのが蝦夷（北海道）であり、また、一五六五年（永祿八年）に耶蘇会士、ルイス・フロイス（L. Frois）が印度の神父にあて、蝦夷に関することを報告していることなども考えあわせると、どうも、ヴェリユ図に表現された上記の島は蝦夷地を意味した画期的な地図であると考えたい。

ところが、その後一五六九年（永祿十二年）メルカトル（Gerhard Mercator）の世界図<sup>(10)</sup>や、一五七〇年（元龜元年）オルテリウス（Abraham

Ortelius）の東印度図<sup>(11)</sup>が作成されるが、この二図からはいずれも日本直北に見えたかの一島は無くなり、これに代って同一方向とおもえるところに約二二から三三島を数える群島が出現し、これがメルカトル図では、さらにその北方に三島がみえる。しかし、同年作成のオルテリウスの韃靼図やアジア図には日本島だけで、その北方の島々は皆無となる。

ところで、オルテリウスはさらに、一五八九年（天正一七年）に太平洋図を出しているが、本図では三〇度〜四〇度のなかに日本が描写され、その直北にヴェリユ図に似た菱形の島が四〇度〜五五度のなかに出現する。この島には *Stade Plata* と記してある。そして、これがまた一五九四年（文祿三年）プランテオ（Petro Pancio）の世界図<sup>(12)</sup>や、一五九五年（文祿四年）ラングレン（Arnold Henria Langren）の東印度図<sup>(13)</sup>、または一六三五年（寛永一二年）ブラウ（Willem Blau）のアジア図<sup>(14)</sup>からは、日本北方の島々は消え去り小島さえ皆無となる。ともあれ、一六世紀後半にいたって、相次いで作成された、ヴェリユ図やオルテリウス図に出現した日本直北の菱形島こそ蝦夷の断定に迫ったものとして注目し値いする。

#### 四 島に表現されたエゾの地名の最初

従来の地図に表現された北海の島々は、蝦夷地を意味して表現したものと考えられながらも、これを断定するに確かな資料は得られず、あくまで推測の域にとどまったが、一七世紀も中半にいたり、いよいよこれが一六五〇年代に作成されたモルティール（P. Morier）の支那図<sup>(15)</sup>によって実証される。

この時代になると、日本島の輪郭もかなり正確に概念づけられてくる。

一六四〇年代に出たブリエ (Philippe Briet) の日本図<sup>(18)</sup>などはその代表的なものである。

ともあれ、モルティール図であるが、*JAPAN* は三〇度〜四〇度のなかに描写され、三五度線が日本島の中央部を貫いている。四国・九州はもちろん伊豆・房総・能登などの各半島も明瞭となり、今日の地図と比較してみても劣らぬほどの感じである。この日本島の北部四〇度〜四五度の位置に、東西長方形に似た島が表現され、そのなかに *IESO* と記されている。

すなわち、従来の地図上に出没怪物の存在として注目された、まぼろしの北海の島はこのモルティール図によって蝦夷として立証されたこととなる。

さて、これより一世紀ほど前に作成されたヴェリユ図 (一五六二) や、オルテリウス図 (一五七〇) に描写された一島はこれに共通的な島ではなかったろうか。それはつまり、各々島が地図上の距離とはいえ、日本の北端に最も近接してきた時点でエゾ島の出現に至ったものと推測されるからである。

## 五 樺太と思われる島の出現

一六一一年 (慶長一六年) スペイン人のセバスチアン・ビスカイノ (S. Vizcaino) が著した「金銀島探検調査書」によれば、本州の北端と韃靼の間に蝦夷島があると記され、また一六一三年 (慶長一八年) 平戸の英国商館長のリチャード・コックス (R. Coxs) が東印度会社に出した書簡には蝦夷は韃靼の一部であると記し、あるいは一六一五年 (元和元年) 耶蘇会の宣教師、シロラモ・デ・アンゼリス (G. de Angelis) は単身蝦夷地を踏

査し、蝦夷は韃靼の先端で北アメリカと相対すると報告し、さらにアンゼリスは再度渡航し、蝦夷は四方を海に囲まれた島であるとして宗谷海峡と樺太について初めてふれている。<sup>(19)</sup> かくして、当時蝦夷地に関する認識はかなり高度に発展してきていたことが推測できる。一方、この時代になると日本人による樺太探検隊も活躍するようになる。しかし、その結果が地図上に現われるのはこれより以後のことになる。

すなわち、一六四三年 (寛永二〇年) オランダの東印度会社は画期的な北方地域の探検を試みるが、この時フリース (M. G. de Vries) が探検図を作成する。この地図をもとにして一六五〇年 (慶安三年) シエンク II ファルク (P. Schenk II Gvalk) が作成した日本図<sup>(19)</sup> や、あるいは、また同年にヤソニウス (J. Janssonius) も同様の地図を作成したが、この二図はいずれも内容が同一である。本図には日本島が三〇度〜四〇度のなかに描写され *JAPONIA* と記され、現代の緯度上からみた位置はかなり正しくなってきたているが、経度は一六〇度〜一七五度で相変らず旧来の踏襲となっている。さて、問題の蝦夷は *IESO* と記載され、四二度以北に現われ、北海道・樺太・国後島・択捉島・得撫島の位置が認識され、その結果は実位置と等しき場所が地図上に描写されているが、しかし、樺太・北海道・国後は地続で一体となっていて、しかもその面積は日本島をしのぐほどの大きさの陸地に表現されている。つまり、宗谷海峡は意識されていないのである。ともあれ、中知床・北知床が表現されている事実からして、樺太の存在が実証された地図としては画期的なものといえる。

その後、一六六二年 (寛文二年) ゴース (Peter Coos) が、アジア北東<sup>(20)</sup> 図を作成するが、この図もフリースの探検図を基礎にして作成したもので

あるからしたいした変化は見られない。

## 六 大陸と陸続になった樺太

上述のごとく樺太の存在が確認され、これが地図上に出現するが、しかし、まだまだその全貌が把握されるまでには至らなかった。一六九〇年（元禄三年）来朝したドイツ人ケンプエル（E. Kämpfer）の著す「日本史」にも蝦夷島（北海道）および奥蝦夷（樺太）は大陸に続き、さらにこれが韃靼ないしはアメリカのいずれに接近しているのか不明であるといわれている。<sup>(22)</sup>

このように蝦夷が大陸と地続きであるという概念は当時作成された地図の上でもこれがよく現われている。一六九〇年（元禄三年）コロネリ（P. M. Coronelli）が作成したアジア図<sup>(23)</sup>では、さきのフリース系統図において蝦夷の一部と理解した三半島、つまり、北知床・中知床・国後島も包括して、これがすべて大陸に続く大半島であると誤って認識されている。しかも、これが蝦夷ではなく「Tartavia」（韃靼）の一部となっている。そして、フリース系統図における Comanieland（得撫島）が ESSO に変わり、その上樺太の位置の概念が著しく誤認された結果となっている。

次いで、一六九二年（元禄五年）ウイトセン（Nicolaï Witsen）の作成した韃靼<sup>(24)</sup>では、まさに三半島はぼかされ、その存在が無視されたかのように韃靼に連続する大半島の形で表現されている。しかし、蝦夷の地名は得撫島から戻ってフリース系統図と同様にその半島の先端に ESSO と記載されているのがせめてもの救いといえよう。緯度は択捉島の南端を四五度線が貫き、さらに、その北方の半島内を五〇度線が通過していることからみて大陸に続いている表現ではあるが、樺太の実際の位置の概念には誤りが

ないようである。このように地図上からは、一七世紀後半において、樺太と北海道は地続きで大陸の半島と考えられたが、一八世紀にはいりこの概念は分解する。すなわち、一七二〇年代にホマン（Johann Baps Homann）の作成した世界図<sup>(25)</sup>においては、大陸に続く蝦夷と日本の海峡、つまり津軽海峡に当るところ、緯度で示すと四〇度〜四七度のなかに大小一六島が点在出現する。これは奥蝦夷（樺太）と蝦夷（北海道）を分離した概念が、考えられるが、しかし、一七一〇年（宝永七年）前後、清国が実測して作成した「皇輿全覽図」によると、この場合、樺太附近については実測せず、土人からの聞きとりによって北緯五〇度を南端として適当に描写したものであるといわれている。

また、日本の松前藩が作成した地図では樺太の北端を五一度にしていることなどを考察すると、純粋に分離した概念ではなく、自国に近接する属島の両者の吸引的意識がかかる結果として現われたのかも知れない。

ともあれ、一半島から分離した概念と、さらに半島のまだ未発見の間宮海峡は峡谷の地形として、大陸と半島に挟まれたまま六〇度の辺までくいま表現されていることは、半島から隔絶した概念に移項していく段階の現れとして注意される。そして、これが次の一七三五年（享保二〇年）ベラン（Jacques Bellin）作成の日本およびカムチャッカ図<sup>(26)</sup>では峡谷に相對する西岸部に凹凸が現われると、ともにフリース系統図で見た東海岸の北知床・知床・国後の三半島が再度その姿を現わし、一見すると形を整えたかに思えるが、しかし、また奥蝦夷と蝦夷が接続する概念に逆戻りして、津軽海峡に点在した一六島はわずかに五島を残して消え去り、接岸距離も短くなる。そして、半島北東岸の五〇度から五五度内には大きな島が出現するがこれが何島であるかは次に説明する。

## 7 ESO (Hn) の北部の TRIENSE (サガリン) の出現

一八世紀にはいると、ロシア人による北方の探検が活発となり、探検隊は次第に南下してついに一七三二年(享保一七年)には、イヴァン・シエスタコフ(I. Shestakov)の探検船がサガリンの北部にまで至り、測量を開始する。一七三四年(享保一九年)キリロフ(Johann Kyrilow)の作成したロシア図には、従来の大陸に続く半島の概念は一扫され、新たに日本島の北部、つまり津軽海峡をへだてて EDSO と記す一島が現れる。これが北海道であることはまちがいない。しかし、この島の北東部には前述の北知床・中知床の細長い半島がつきまとい残存している。

また、海峡のなかにはベラン図に見られた五島は位置をかえたただけで、そのまま残されている。そのみではなく、さらには蝦夷の北部に海をへだて、弓形の島の出現が目される。しかもこの島には TRIEN (サガリン) の文字の記載がある。これによって、はじめてサガリン、すなわち、樺太の存在が意識され地図上に明確に位置づけられたことになる。しかし、また別に同年(一七三四年)にダンザイル(JeanBaptiste Bourguignon d'Anville)が韓艮図を作成するが、この地図によって前図に現われた弓形のサガリンは SAGHALIEN と記載され、そのまま残るが、しかし、ここに問題となるのは蝦夷の島が克明に分断されていることである。つまり、北海道に該当すると思われる島と、サガリン島との間に新たな一島が出現したことである。そして、この島の東部に北知床の半島が表現されている。島内には Terra cuius litus orientale Hollandicseu Continuatio terrae Eso v Jesso Visum eis と記されている。すなわち「オランダ人が蝦夷と陸続きであると想像した陸地」という意味に解されることからして判然と

意識して蝦夷と分離したものと推測される。

さて、そうなるのと新たに出現したこの島とサガリン島との関係はどうなるか、ここに、また大きな問題が提起されることになる。ところが、一七五二年(宝暦二年)同一人 d'Anville 作成のロシア図には前図において、新たに出現した一島は中知床島をだきかかえた形のまま大陸に接続してしまい、JESOGASIM と記載の島と SGHALIEN と記載の二島だけとなり、北知床半島はサガリン南端に接続してしまい、つまり、北海道および南樺太は大陸に接続し、北樺太がサガリンとして表現されたことになる。かかる経緯をたどりながらも次第に樺太の姿は明確になりつつあり、一七八〇年代にロッテル(A. Lortfer)がアジア図を作成するが、この地図からは前図において見られる大陸に続く、南樺太の半島は無く、IDE JESO (北海道)と Sahalien (樺太)の二島だけが残り表現され、日本の北海はぎれいに樺太・北海道・千島列島の位置を地図上に配列することになり、いよいよ樺太は幻想の島から現実の島へと急転することになる。

## 八 明確になった樺太

一五世紀後半に作成された地図上において、日本の北洋に点在する島の出現を見た当時、すべて探検する人々は北海にうかぶ島々を発見し、その存在を意識した。しかし、これははるかに距離をへだて、時には海岸からあるいは海上から望遠して知った幻想の島のことでなかったろうか。それから後の約三百年の歴史の過程は島の形状をその時の人々の脳裡に各様にとらえさせた。すなわち、小群島から大きな島に、あるいはそれが大陸に続き、また、これが大陸から分断され、やがて、その島も分解していくといった経過のなかで、時にはこれが後退の認識すらみられたが、しかし、

人類がたゆむことなく知らうとして述べた北海の孤島も、ここに初めて燭光をあびることになる。一七八七年（元明七年）ラ・ベルーズ（Ornie de la Perouse）が作成した太平洋探検図<sup>(33)</sup>には、ロツテル図に見られた弓形の Sahalien 島は無く、Jesso の北方約四二度、五八度のなかに明瞭に大きな島の出現を見る。この島には SEGHALIEN と記されていて、島の中央部を五〇度線が通過している。この島こそまぎれもなく樺太であり、待望の樺太はついに一七八七年（天明七年）ラ・ベルーズの手によって完全に地図上に出現させたのである。

フリースにより発見され、それが一六五〇年（慶安三年）のシエンクII フアルク図に現われ、その後昏迷した北知床および中知床、そして、これが一七三四年（享保十九年）キリロフ図に突如として現れた弓形のサガリンの三者いずれも和して接続し、ここに一島を形成するに至ったのである。そして、この島には能登呂・中知床・北知床の各半島や知良岬と、そして亜庭・多来加の両湾や、さらにこれが五〇度以北にも湾や半島が描写されている。

ここに注意すべきは、この時すでに海峡（間宮海峡）をへだて大陸と分離した南北に長い島のことである。つまり、この時点でラ・ベルーズはすでに海峡の概念に到達していたものと考えられ、これはまさに画期的な地図の完成であるといえよう。

一八〇六年（文化五年）ワイマル地理学研究所のワイマルは本図を模写してアジア図を刊行したが、この地図の表現ではむしろ樺太の輪郭は単調にさえ見え、樺太に限っての表現は後退的な観がある。

## 九 大陸と再び陸続きになった樺太

一七八七年（天明七年）ラ・ベルーズの樺太に関する地図上の偉大なる

業績も、其の後の二〇余年間はまたもや足ぶみの状態となる。すなわち一八一一年（文化八年）クルーゼンステルン（Adam Lwan Krusenstern）が太平洋探検図<sup>(34)</sup>を作成するが、この図では島の南半部の輪郭は整いを見せむしろ、ラ・ベルーズよりも真形に近づいた感じではあるが、しかし、海峡の概念はくつがえされ、大陸が陸続きになって表現されている。この地図は一八一一年（文化八年）の作成であるが、実はクルーゼンステルンは、その六年前の一八〇五年（文化二年）に実際に樺太の探検を試みている。

その時かれは樺太の東岸を北上し、北端を廻りゴロワテエフ岬に至るが、これより先きに船を進めることができずして、そのため樺太の北西部は短い帯状をなして大陸と陸続きであるという概念で表現したわけである。しかし、間宮海峡附近は陸続きになっていない点が注目される。このクルーゼンステルンの探検の三年後、つまり、一八〇八年（文化五年）間宮林蔵の探検により間宮海峡が発見され、樺太の輪郭の全貌が確定的となる。そして、この探検報告にもとづいて一八〇九年（文化六年）高橋景保が「日本辺界略図」を作成するが、この図にはもちろん樺太は明瞭に大陸から離れた孤島として描写されている。それから二年後にクルーゼンステルンの太平洋探検図が出た年になるが、前述のごとくこの地図は、大陸と樺太とが陸続きになっている。そののみか、それから一〇年後の一八二一年（文政四年）ライヒアルト（G. G. Reichard）がアジア図を刊行するが、この地図でさえも樺太は大陸と続いているのである。しかし、クルーゼンステルン図における陸続きの部分を帯状というならば、ライヒアルト図では紐状といえるごとく、もっと南部において僅かに陸続きになっている描写である。

以上のごとく、間宮海峡の発見以後にさえもかかる誤解された地

図が出たのであるが、これは、間宮林蔵の海峡の発見によって作成された地図がシーボルトによって世界に紹介されるのが一八五一年（嘉永五年）で、ずっと以後になってのことであつたからである。

## 一〇 むすび

◎海外で作成された地図上に「*ウー*」の地名が出現する以前（一五世紀後（一七世紀中）の地図をみると蝦夷地方に該当すると思われる地域は島の形状や位置について、きわめて不安定な概念であつたが、しかし、すでに世界的に注目されていたものと推測される。

◎その後、「*ウー*」の地名が地図上に表現される時代（一七世紀中）になると、島の存在は認識されてくるが、その後の時代経過のなかでは島であつたものが、大陸に陸続きになるといった異状な概念で作成された地図も出てきた。

◎しかし、また探検が進歩し、その結果作成した地図は部分的に見れば誤認はあつても、次第に正確な樺太の輪郭を地図上に形成してくることになる。

◎この業績の結果、一八〇八年間宮林蔵が海峡を発見したが、この発見の以前、すでに樺太が島であることを黙認した人々がいるのではないかという推測もできる。

◎なお、地図上に現われた島や位置の変化が時の領土拡大意識といかに関係するか、

また、海外作成図と日本作成図といかに関連するかなどは今後の研究課題となる。

## △注▽

◎本稿にあげた地図は筆写蔵以外のものはすべて松本賢一編・欧州古版日本地図集（昭和一八年）による。

(1) 洞富雄・樺太史研究―唐太と山丹―昭和三年・一五頁  
 (2) 後に作成した偽のものであるという説もある。原図が無いのでその真意は不明

(3) 直径五〇七ミリ・メートル、トスカネリの地図と、この地球儀とは内容が類似している。

(4) ベハイムの地球儀をまねたもので、特にアジアの東岸の日本にその影響がみられる。

(5) Kerschner より複写したもの。作図者はポーランド人。  
 (6) Telez より複写したもの。作図者はイスパニア人。

(7) Telez より複写したもの。作図者はオランダ人。日本附近はかなりたらしめに描写されている。

(8) 三八二×二六三ミリ・メートルの図。作者はドイツ人。  
 (9) スペチヤ海軍博物館蔵 Corteseo より複写した図。

(10) 前掲書一五頁  
 (11) 二〇〇〇×二二六〇ミリ・メートル、パリ国民図書館蔵。Dahlgren より複写した図。

(12) 五〇一×三四九。地図帖に五三枚の地図が含まれている。作図者はベルギー人。

(13) 五七六×四〇六ミリ・メートル、作図者はポルトガル人。

(14) 五二〇×三八五ミリ・メートル、東洋水路記集所蔵。作図者はポルトガル人。  
 (15) 五五八×四二二ミリ・メートル。オランダの地図専門家。

(16) 五九五×四五八ミリ・メートル  
 (17) 五二三×三七三ミリ・メートル

(18) 前掲書、一六頁

(19) 五四六×四四九ミリ・メートル。フリース系統の図としては初期のもの。  
 (20) 四〇〇×三三三ミリ・メートル。複製版・筆写蔵

(21) 五四六×四四四。エゾ付近はフリースの探検報告書により作る。  
 (22) 前掲書、二二頁



- (23) 九八六×六〇三ミリ・メートル
- (24) 九七八×五四二ミリ・メートル
- (25) 五五四×四八五ミリ・メートル、ホマンは一八世紀にドイツで多くの地図を発行。
- (26) 前掲書、一三三頁
- (27) J. G. G. 所蔵、ロシアの資料により作成した。
- (28) 前掲書、二八頁
- (29) J. G. G. 所蔵、康熙帝の大清一統図の影響を受けた図。作図者はロシア人。
- (30) 七七二×四九五ミリ・メートル。北に二島を示しているが、これが樺太、作図者はフランスの地理学者。
- (31) J. G. G. 所蔵
- (32) 七七三×五二〇ミリ・メートル。クックの探検図をもとにして作成。
- (33) J. G. G. 所蔵。実際の探検によって作成した図。作図者はフランス人。
- (34) 四六五×三〇二ミリ・メートル。ラ・ベルーズの地図を参考にして作成。
- (35) J. G. G. 所蔵、長崎へ来たロシアの使節団を乗せた艦長が実際に探検して作成。
- (36) 三三八×二七八ミリ・メートル。クルーゼンステルン図を参考にして作成。